

# 大雪 地震被害 どうなる？ 今年の米づくり

## これまでの経験に加えて 情報を共有し合うことが必要

### 生産者通信

NPO法人  
米ニケーションセンター  
定価 100円(送料込)

あの連日の大雪と寒さはどこに行っても3月に入るとようやく春の気配を感じさせてくれる暖かな日差しが戻ってきました。時には足踏みはありますがゆつくりと、しかし確実に春の足音が近づいている気が感じられます。我が家の周辺の水田は海岸線からわずか4km程度ですが、まだ50cmを超える残雪があります。先日の集落の農家組合の総会で、従来は4月の最初の日曜日にやっていた水田水路の清掃や補修の共同作業予定を、2週間遅らせて4月15日に行うことに決定しました。この程度の遅れは、水田作業に実質的な被害はありません。むしろ農作業を自然の歩みに



沿って行うことは当たり前のことであり、好ましいことといえるかもしれません。しかし、同じ県内でもまだ3m前後の残雪地帯もあり、こうした地域では農業に大きな支障がでてしまうでしょう。それでも対処の手だてがありません。先人から引き継ぎ、これまで蓄積した様々な経験を活かすことが可能でしょう。ところが、東日本大地震で津波による塩害農地や原発事故による放射能に汚染されたままの農地への対処方法は経験の蓄積もなく、

手さぐり状態が続いているといっても良いでしょう。試行錯誤と長い時間との闘いにならざるを得ません。国や自治体による支援はもちろんです。大学や研究機関による長期間にわたる継続的な協力体制が不可欠です。また、生産者同士や消費者との新しい形の連携や相互支援のあり方が問われているのであり、その模索が単に被害者支援だけに止まらず、これまでの社会のあり方を変え、確かな展望を見出し、いく大きな力になると思われます。基本になるのは、出来るだけ個別の詳細なデータの蓄積とその公開によって情報を共有し合い、信頼関係を構築することではないでしょうか。「絆」は、その上ではじめて結び合えるものではないでしょうか。

今年産から県が交配・育種を進めている、次世代晩生品種の現地栽培試験が県下13カ所でおこなわれる予定です。新品種候補は6つに絞り込まれたようですが、コシヒカリBと従来コシヒカリ、試験地によつてはコシヒカリ新濁B L13号の8、9種類の比較試験が各所の同一圃場でおこなわれます。出穂時期はコシヒカリに比べてそれぞれ5、9日遅く、23年産の作物研究センターなどのデータによれば、千粒重はコシヒカリよりも重く、味度値も高く、新濁県産米の新世代として期待がもてそうです。しかも、コシヒカリに比べて幹長が10cm、20cm前後も短く、耐倒伏性が強く、倒伏に弱いコシヒカリのような弱点もありません。しかし、その長所が逆に禍になつてしまうのではないかと心配もあります。多肥栽培による多収も可能性があるという事です。これまででもせっかく優れた資質をもつていた品種が、多肥栽培による



**フレコンについてのお願い**  
フレコンでお米を納入する場合、  
食品衛生法の容器包装に**食品用フレコン**  
に関する規格基準を満たす  
を使用してください  
食品用以外のフレコンは鉛が使用されていたり、生産物賠償責任保険(PL法)が適用されません。必ず食品用を使用するようお願いいたします。

増収が可能であったばかりに、品質や食味の低下で消えていったものがあります。それは新品種育成者の責任ではなく、栽培をした農家の責任です。しかし、「少しでも余計に獲る」というDNAしか受け継いでいない農家だけを責めるのも酷なかもしれません。  
《内山常蔵記》